

けいすい

静けさとしっとり感を生み出す

Creates a sense of tranquility and a rich, refined feel.

「しっとりと落ち着きのある学校」を目指し、自律的な学びの推進と毎朝の宣言による習慣作りに取り組んでいます。あわせて、校内の環境整備も進めています。

本校のA校舎は、広い廊下を挟んで教室が対面する構造となっています。これまで子どもたちの動線が定まりにくく、それが落ち着きのなさにつながっているのではないかと考えました。そこで、廊下の中央に共有スペースを設置することにいたしました。このスペースは一方通行の実現や音の緩衝として役立つだけでなく、今後は子どもたちが自律的に学ぶ場としても活用していく予定です。これから観葉植物や学習に役立つ備品などを配置し、より有効に活用できるよう環境を整えていきます。



目に入る情報を少なくし、注意力が散漫になることを防ぐために机上や棚の整理をしています。



こえていく！学力向上編

Improving Academic Achievement

「船の上に26匹の羊と10匹のヤギがいます。このとき、船長は何歳でしょう？」

フランスのグルノーブルにある数学教育研究所にて、7歳から9歳の子どもたちにこの文章題を解かせたところ、9割以上が「36歳」と答えたそうです。（シン読解力～新井紀子著より）

「よく分からないけれど、2つの数字があるから足してみた」ということなのでしょう。「そんな馬鹿な」と思われるかもしれませんが。しかし……

今年度の全国学力調査で、次のような問題が出題されました。

「1cm³の立方体が36個あります。36個をすべて使って、高さが4cmの直方体を1つ作りしました。その直方体の体積は何cm³でしょう。」

この問題に対する本校の正答率はとても低いものでした。体積は「1cm³の立方体はいくつ分か」を理解していれば計算は不要で、そのまま「36cm³」と分かります。しかし、多くの児童が「144cm³（36×4＝144）」と答えていました。まさに先ほどのフランスの子どもたちと同じように、「出てきた数字をそのまま計算する」というパターンの誤答をしていたのです。

『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』などで話題となった新井紀子先生の著書の中でも、「意味を理解せずにパターンで解いていると、普段目にしない問題に出くわしたとき、あり得ないような解答をしてしまう」と指摘されています。新井先生の著書では、知識や情報を正確に読み解く「読解力」の重要性が説かれています。

子どもたちが「本当に文章の意味を読めているか」を意識した指導を行うことが、基礎学力の向上につながるのではないかと考えています。手立てを工夫し指導をしていきます。

学びの部屋 A section showcasing the learning process

5年1組の学びの様子を紹介します。

今年度進めている「予習型授業」の効果を検証するため、全職員で授業を参観し、指導方法についての協議を行いました。学習内容は算数の「公倍数」です。子どもたちは前時に立てた「めあて」にそって予習をし、本時の授業に臨みました。タブレットを活用しながら、グループで互いの考えを交流させました。日頃からグループでの学び合いに取り組んでいる成果もあり、子どもたちは自分たちで意見を取りまとめ、全体発表でも班の考えを分かりやすく伝えることができていました。予習型授業の強みである「習熟」と「活用」の時間をしっかりと確保できたことで、子どもたちは自力で何枚ものプリントに意欲的に取り組んでいました。日々の学びを通して、しっかりと力を高めている様子が伝わる授業でした。

